ISSN 0388-4732

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

特集　越前禅定道　　第27巻　第１号

蛇　塚

信仰の対象であった白山には、古くから修行のための登山が行われ、信仰にまつわる伝説や言い伝えが山頂部や登山道沿いに数多く残されています。白山への登山道のひとつ、観光新道（旧越前禅定道）の上部に蛇塚（じゃづか）と呼ばれる約1.2mほどの高さに石をつんだ塚があります。ここは地形的に言えば、地すべりの活動に伴ってできたクラック（亀裂）の中の凹地にあたります。

この塚には、白山開山の祖と伝えられる泰澄大師が、白山で悪さをしていた3,000匹の大蛇のうち、特に凶悪な大蛇1,000匹を斬って埋めた場所と言われています。残りの2,000匹は、山頂部の千蛇ヶ池と福井県大野市の刈り込み池の２か所に、それぞれ1,000匹ずつ封じ込められたとされます。山麓の白峰村では大蛇はいわゆる蛇ではなく竜を指し、山で1,000年、川で1,000年、海で1,000年修行を積み、天に昇って天人に生まれ変わるといわれています。

（小川　弘司）

旧越前禅定道をたどる

梅　典雅

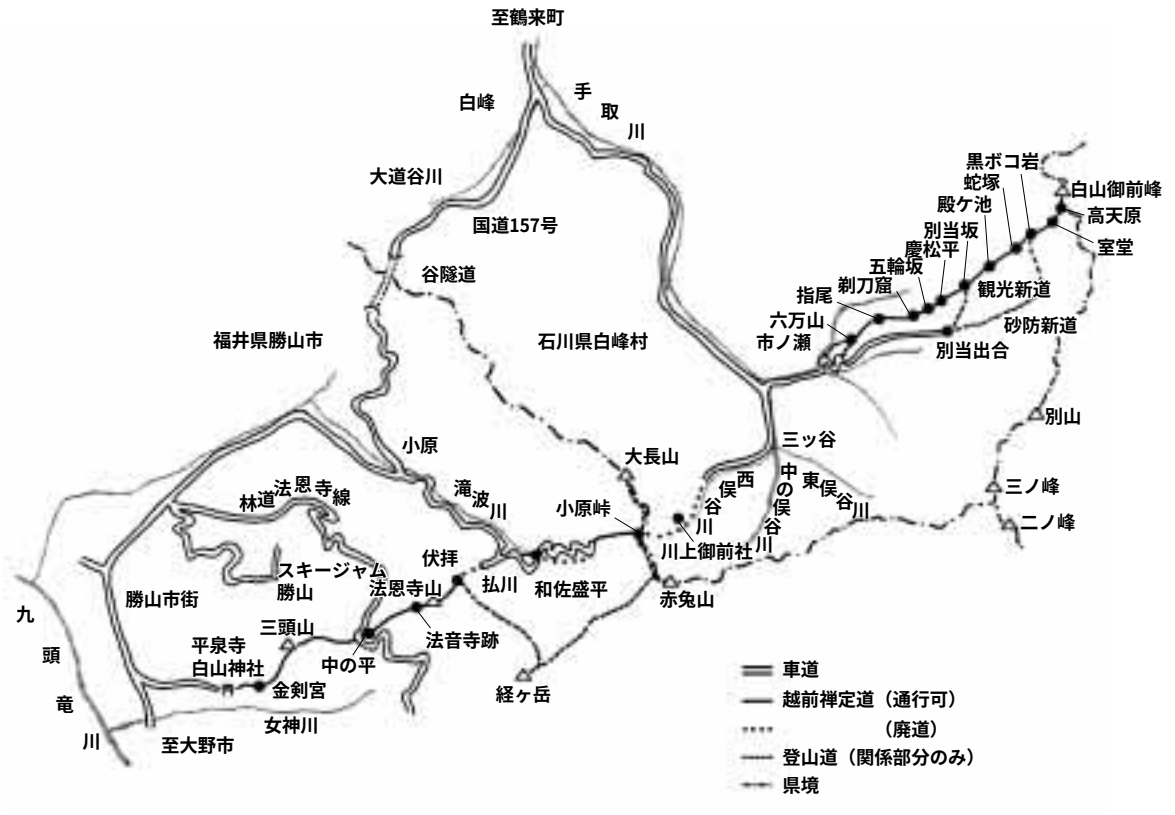
小原峠付近からの白山

白山信仰の登拝道－白山禅定道

古くから神仏の坐（ま）します山として崇拝されてきた白山は、“越の大徳”と称される越前の僧、泰澄（たいちょう）によって、養老元年（717）に開かれたとされています。また、白山比咩神社に伝わる『白山記』（1163年頃原型成立？）には、天長９年（832）に三方（加賀、越前、美濃）の馬場（ばんば）（登拝の拠点）を開いて、そこから御山（おやま）に参詣すると書かれており、平安時代前期から禅定道（ぜんじょうどう）と呼ばれる登拝道があったことは間違いないでしょう。

なかでも越前禅定道は、白山開山の伝承とともに“泰澄大師踏み分けの道”とか“白山本道”などと呼ばれ、今日まで語り継がれている道です。その道筋は、図のとおり平泉寺（へいせんじ）から法恩寺（ほうおんじ）山、小原（おはら）峠を越え、三ツ谷、市ノ瀬を経て六万山へ登り、現在の観光新道を通って室堂、御前峰に達していたというのが通説になっています。江戸時代以降は、今の谷峠付近から白峰（牛首）を経由する道が主流になるなど、時代による変遷や異説もありますが、ここでは、最も一般的な上記の説に従い、古道をたどってみることにします。

なお、地名表記は原則として、現在、使われているものを用い、異名・異字などは適宜、かっこ書きで記すことにします。



平泉寺白山神社

法音寺跡

平泉寺から小原峠

平泉寺は、古くは多くの堂舎が立ち並ぶ一大宗教拠点でしたが、明治の神仏分離以降は平泉寺白山神社となっています。苔むした境内を進むと、御前峰、大汝峰、別山の神々を祀った三つの社殿が並び、さらに石段を登ったところにある三ノ宮から禅定道が始まります。うっそうとした樹林、尾根筋の深く掘れた道、金剣宮の祠など歴史を感じさせる道です。

三頭山（みつがしら）を経てさらに登ると、林道法恩寺線を横断し、瀟洒（しょうしゃ）な避難小屋が建つ「中の平」（釈迦の原）に着きます。ここへも車道が通じ、一帯は森林公園やスキージャム勝山のゲレンデになるなど、中世から一挙に現代へ引き戻されるといった感があります。道はゲレンデの中を通ったり、林に入ったりしながら登り、小さな祠のある平坦地に出ます。ここは昔、法音寺（法音教寺）があったとされるところで、土塁や礎石に往時が偲ばれます。ここから法恩寺山頂はすぐで、突如、目の前に現れる残雪の白山には、思わず感嘆の声が出るほどです。

法恩寺山から白山を望む

法恩寺山の北の峰は伏拝（ふしおがみ）と呼ばれ、昔は白山遙拝の地であったようです。ここから登山道は右に聳（そび）える経ケ岳へと続いていますが、禅定道は、滝波川支流の払川（はらいがわ）へ下っていました。この間は、近年、地元有志により刈り払いがなされましたが、危険な箇所もあり、まだ一般供用にはなっていません。払川からは、工事用の車道、さらに小原からの林道が和佐盛平（わさもり）（早内森）を経て延びているため、この間の古道は消失、または廃道化しています。林道終点からは古道が残り、福井・石川県境の小原峠までは、赤兎山や大長山への登山道として利用されています。

小原峠の石仏（現在は祠に安置されている）

小原峠から市ノ瀬

小原峠は、古くは川上峠、覗峠（のぞき）または雉子神峠（きじがみ）とも呼ばれ、伏拝でもあったと思われます。ここで道に迷った泰澄を白雉が案内したという伝説があり、雉は“木地師”であるとの説や“雉子神（上）”は峠の下または大長山を指すといった説もあります。峠を石川県側へ少し下ったところには、二体の石仏が新しい祠のなかに安置されています。

再建された川上御前社

小原峠から古道は、西俣谷川沿いに三ツ谷（秘密谷）へ下っていたとされていますが、現在は廃道となっており、道跡はほとんどわかりません。ただ、途中の左岸台地に川上御前社跡があり、三ツ谷出身の有志らからなる川上御前社跡保存会が、昭和63年（1988）に再建した祠と由来を記した案内板が立っています。また、大長谷出合の上流で治山工事が行われており、三ツ谷から工事用の車道が延びてきています。三ツ谷は既に住む人もなく、西俣谷川と中の俣谷川の間の高台には丈六（じょうろく）神社の跡が残っています。

三ツ谷　西俣谷川（右）と中の俣谷川（左）の間に丈六神社があった

三ツ谷から市ノ瀬（一の瀬）にかけては、車道となっており、古道の跡は認められません。市ノ瀬は現在でも温泉があり、白山登山の基地として賑わっていますが、昔も同様であったことが江戸時代の紀行文などからうかがえます。また、白峰林西寺白山下山仏（県指定文化財・歴史資料）のひとつである木造薬師如来座像は、旧白山温泉（湯本）にあった薬師堂から林西寺に移されたものとされています。

市ノ瀬から慶松平

市ノ瀬からの古道は、柳谷川を渡ったところに一の鳥居があり、直に六万（部）山へ登っていたようです。江戸時代の紀行文には、五智如来堂、顔見坂、金鎖、相撲馬場（しまい馬場）などといった地名が記されています。この間の道は、江戸後期までは使われていましたが、明治以降、湯の谷の旧白山温泉から登る道にとって替わられ、廃道となったようです。この湯の谷側からの道も廃道となっていましたが、平成11年7月に開通した復元ルートは、概ねこの道に沿ったものです。六万山からは、前述のように古道が復元され、ブナやミズナラの林のなかを歩きます。指尾（1418m）までの間には、桧宿があったとされ、石段と思われる石積や数本のヒノキの巨木が認められますが、位置の確定にはまだ考証が必要と思われます。指尾は伏拝と呼ばれていたように、御前峰、大汝峰、別山の白山三所権現が望まれ、古くは鳥居もあったようです。また、以前、ここに半壊した一体の石仏がありましたが、現在はありません。指尾からは、天井壁と呼ばれる断崖上の細い尾根を通り、大だわ、鳥冠石、剃刀窟、五輪坂などを経て慶松平（尾平）に達します。剃刀窟は、泰澄大師が剃髪した所と伝えられ、廃仏毀釈によって破壊された石仏がわずかに残っています。また、慶松平には少なくとも江戸時代から明治中期にかけて慶松室が存在しました。白峰の林西寺に所蔵されている国の重要文化財、銅造十一面観音立像は、慶松室の本尊であり、近世、福井の商人慶松屋五右衛門が寄進したものと伝えられています。

指尾の石仏（現在は消失している）

剃刀窟（昔はもっと大きな岩屋であったと思われる）

慶松平から御前峰

慶松平から別当坂を登ったところで、観光新道に出合います。つまり、この先、黒ボコ岩から室堂、御前峰とたどる越前禅定道の道筋は、現在の登山道とほぼ同じということです。別当坂の分岐から先は、細い尾根や岩場が続き、仙人窟、餓鬼ヶ喉、畜生谷などといった名が付けられていました。殿ケ池避難小屋の約100m手前にある池は、昔は御捻り池とか権現の御池などと呼ばれていたようです。ガレた岩尾根に名付けられた真砂坂や馬の立髪、さらに蛇塚や弥陀ヶ原といった呼称は今でも使われていますが、室堂は越前室または御前室、御前峰は大御前と称されていました。また、室堂から御前峰に至る御前坂の途中には、青石や高天原の石仏があり、千蛇ヶ池への道の上部には六道道（室）の遺跡も残っています。

以上のように、越前禅定道は一部の区間を除いて古道をたどることができるようになりました。すでに利用されている加賀禅定道（一里野～室堂）や美濃禅定道（石徹白道）とともに、白山信仰の歴史にふれ、昔の人を偲びながら歩くのもよいのではないでしょうか。

＜自然保護課＞

市ノ瀬の移り変り

―旧越前禅定道の中継地・湯治場―

橘　礼吉

現在の市ノ瀬（市ノ瀬ステーションと六万山）

白山は奈良時代に泰澄が開いたと伝えられ、平安時代初期には、山麓の加賀・越前・美濃の三方向から登山ルートが開かれたとされています。越前側は、現勝山市平泉寺町を起点として法恩寺山・小原峠経由で市ノ瀬へ、ここから直接六万山へ登って、今の観光新道を登るコースで、いわゆる越前禅定道です。平泉寺より市ノ瀬までは登り下りが激しく丸一日かかりますので、市ノ瀬は実質的に禅定道の基地となっていました。江戸時代になると、便利の良い谷峠・白峰経由で市ノ瀬に来るようになり、また加賀の人は加賀禅定道は長く時間がかかるので、市ノ瀬ルートを利用し始めます。さらに平泉寺が経営していた温泉に湯治に来る人も増えていました。

江戸時代天保期頃の市ノ瀬

上市ノ瀬観音堂にあった聖観音

陸地測量部が地形図を発行するまでは、「一ノ瀬」と書いていました（ここでは便宜上市ノ瀬に統一）。江戸時代天保期の集落戸数は、旧家笹木源五郎家を含めて12戸。12戸は、下流側の今宿（いまじゅく）谷出合（現在小地蔵のある付近）より集落中央部（ビジターセンターの下付近）、さらに岩屋俣（いわやまた）出合までの間に散在していました。12戸は、焼畑でヒエ・アワ等を栽培し、ブナ・ナラ等を材料に鍬の柄・除雪具・登山用杖等の木製品作りで生計をたてていました。

禅定道の基地でしたから信仰上の祠堂も多くありました。集落下手に今宿（下市ノ瀬）薬師堂、中央に市ノ瀬室（むろ）、上手に上市ノ瀬観音堂、少し離れて柳谷左岸崖の上に猪鼻（いのはな）護摩堂、柳谷川左岸猿壁堰堤付近に内ケ峰辨財天社等が連なっていました。今宿の木像薬師如

「平泉寺版絵図」に描かれる赤岩虫尾社、下市ノ瀬薬師堂、登山口、温泉

来立像、上市ノ瀬の木像聖観音座像は市ノ瀬神社に祀られて残っていますが、後は自然災害や神仏分離策で廃絶しました。

平泉寺発行の絵図によると、柳谷川を渡り、六万山（ろくまんざん）の急坂から禅定道、下流側に行くと温泉道でした。登山口には大鳥居、両脇に「女人禁制」の標柱や、永代常夜燈があったことがうかがえます。登る場合には入山料が必要で、入山料72文を払うと入山の許可証がもらえ、許可証は山上の室堂で返納しました。

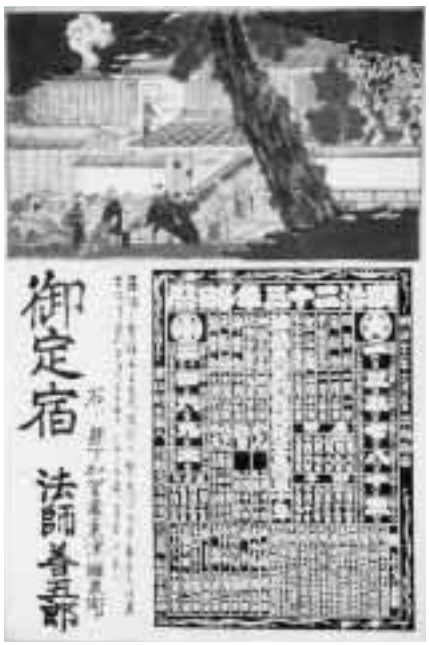
笹木源五郎・法師善五郎伝説

『伝記』では、泰澄に同行したのは臥（ふせり）と浄定（きよさだ）の行者だとしています。しかし、市ノ瀬の人々の伝えでは源五郎・善五郎兄弟としています。地元の伝説概要を次に紹介します。二人は泰澄を案内し開山に協力しました。弟の善五郎は智力に優れ地形を読み登路を選ぶのに貢献。体力が桁外れに強い兄源五郎は、常に先頭で草木を伐り払いながら登路を開きました。

市ノ瀬製の源五郎メンパ、右は飯、左はお菜をいれる

下山後、兄弟は泰澄に従って全国を行脚して仏法を究めたいと申し出ました。泰澄は源五郎に対し「跡取りだから市ノ瀬に留まり、白山に登拝する人の世話をするように」と諭し、さらに白山桧を材料として曲物（まげもの）（丸型の膳・飯櫃（ひつ）・弁当箱）を作って生活出来るようにと技術を伝授し、「笹木」という姓を贈って去って行きました。今日、桧製曲物弁当箱メンパは殆んど使用されていませんが、明治・大正期の市ノ瀬製メンパは「源五郎メンパ」といい、白山桧を使っていて長もちし、人気がありました。

一方、弟の善五郎は、泰澄に従って里に下り白山の霊験を広めていました。しかし、泰澄は「自分は弟子をもつ程の才能がないから」として同行を断わり、「白山に連ながっている霊泉を導くから、この霊泉で万人を湯治する役僧として世間に尽くせ」と諭し、「法師」という姓を贈って別れました。この霊泉が法師善五郎の湯で、今日の粟津温泉だとされています。



宿、法師善五郎家の
明治23年の宣伝用引札

その後、笹木源五郎家は明治30年北海道へ移住しましたが、３年後に帰郷、昭和９年の土石流で一家全員が亡くなりました。一方、法師善五郎家は、現在も温泉旅館を経営しています。

天保４年７月の白山（市ノ瀬）温泉

天保４年（1833）、福井藩士高田保浄は登山記録『続白山紀行』の中で、市ノ瀬の様子を挿絵入りで非常に細かく書いています。温泉は、湯ノ谷出合より少し上流左岸に、11棟の建物群からなり、平泉寺直営の施設です。丁寧な描写によると木戸外側に茶屋と倉があり、茶屋は食事付宿舎で１日

『続白山紀行』に描かれる温泉（湯本）

『続白山紀行』に描かれる湯小屋内部

温泉薬師堂にあった薬師如来

156文でした。木戸内側には谷側に平泉寺役所、いわゆる管理棟がありました。山側には腰掛（休憩所）や制札（注意事項を掲げた高札場）、水屋（炊事場）がありました。注意事項は、境内での殺生禁止、魚・鳥・肉類の調理禁止、山での薪採取禁止、博打（ばくち）・賭事の禁止、さらに火の用心に心掛ける事等です。続いて山側に板小屋（鍋釜を借りて自炊する宿泊棟）が４棟並び、19室を設けてあり１日75文でした。日帰り入湯者用の天地根元（こんげん）風の草小屋１棟もありました。一番奥に湯小屋があり、屋内間口２間、奥行３間半の規模。泉源は正面の大岩の下で、湯は鳥居の下をくぐらせ湯船に注いでいます。大岩の上に制札、さらに「白山宮」と書いた額が掛かっています。経営者は寺院ですが、泉源に鳥居を置き、額に神社名が書いてあり、当時の神仏混合の様子がはっきり分かります。制札で掲げる禁止事項の中で興味をひくのは、素っ裸での入湯禁止で、下着をつけなければなりませんでした。女性は温泉まで入山を許されていましたが、温泉より奥地は入山禁止でした。だから湯小屋は男女混浴になっていたわけで、そのための規則と推察されます。温泉役所では、白山に登拝できない女性のため、女性救済の曼陀羅を12文で頒布していました。

板小屋より登った山側に薬師堂と平泉寺休息所（従業僧宿舎）がありました。明治７年（1874）薬師堂内仏は白峰村白峰へ強制的に移され、今は下山仏堂に、さらに堂に懸かっていた銅製吊燈籠一対は白峰八坂神社に移されています。

昭和９年当時の白山温泉

昭和９年７月11日

白峰村白峰の加藤せんさん（明治42年生）は18才の時、岐阜県白鳥町石徹白より市ノ瀬に嫁ぎ、ご主人の峠氏を助け白山温泉白山館を経営していました。せんさんにとって、昭和９年７月11日、この日は地獄を見た日となりました。当日の約１時間の出来事を話してもらいました。

午前４時頃、料理場で寝ていたら「命のほしい者は逃げ」の声を聞き目を覚ましました。既に家の中には濁流が流れ込み、渦を巻いていました。黒い物が流れていたので掴まえると長男（一男氏、昭和３年生）で、次に流れてきた物をあげたら次男（茂外治氏、昭和５年生）でした。主人は二人の子供を抱え「料理場から山へ逃げ」と怒鳴っていました。壁が崩れて塞いだので逃げきれず、「登茂子がいない」と動転していたことは覚えていますが、正気が戻ったら登山口の鳥居の下に立っていました。どう行動したのか、どうなったのか全くわからず、立ったまま渦に流されていたのかも知れません。山田屋が流れ、それが自分の旅館にぶつかって倒壊し流れていきました。お客さん９名全員は助かりませんでした。着物の袂の泥を出したら登茂子が出てきました。三足歩ける位の乳飲み子で、目・鼻・口・耳は泥で詰まっていました。主人の弟がシャツを破って懐で登茂子の体を暖めてくれました。「暖かい小便した」と弟が叫び、間もなく泣きだし「助かった」と皆で喜びました。長男は、耳の中に詰まった泥が原因で難聴になりました。次男は２か月後に亡くなりました。

すさまじい体験談です。当時、白山温泉には、旅館２戸、砂防工事労働者対象の雑貨屋１戸がありました。当日、柳谷川・湯ノ谷川の上流で大土石流が発生し、温泉の３戸、柳谷川左岸の８戸の市ノ瀬全戸が流失、家族・宿泊客を合わせ43名の命が一瞬のうちに奪われました。その中で旧家笹木源五郎家を含めた４戸は家族全員が死亡した惨劇でした。大被害を起こした土石流によって河原が上昇した高さは、加藤政治さん（明治43年生、水害時赤岩に居住）によると約30mであったと回想されています。

左より鶴尾登茂子さん、加藤せんさん、加藤一男さん

最近、旧温泉地から旧越前禅定道にとりつくルートが復元されたと聞きました。温泉の江戸時代末期の繁昌や、昭和初期の大水害のことを回顧しながら歩きたいと思います。

白山禅定道（旧越前禅定道）復元整備工事に携わって

舘　　清

白山禅定道（旧越前禅定道）、指尾からの白山

白山は古くから信仰の山として、多くの修行僧が修行のための登山を行ってきました。登山道は、古くは、禅定道と呼ばれ、白山では三禅定道（加賀禅定道、越前禅定道、美濃禅定道）が山麓から山頂へのびていました。今回、環境庁からの補助金を受けた緑のダイヤモンド計画推進事業では、その三禅定道のうち、越前禅定道の一部を白山禅定道（旧越前禅定道）として復元復活させようとするもので、平成９年度より本格的に着手しました。

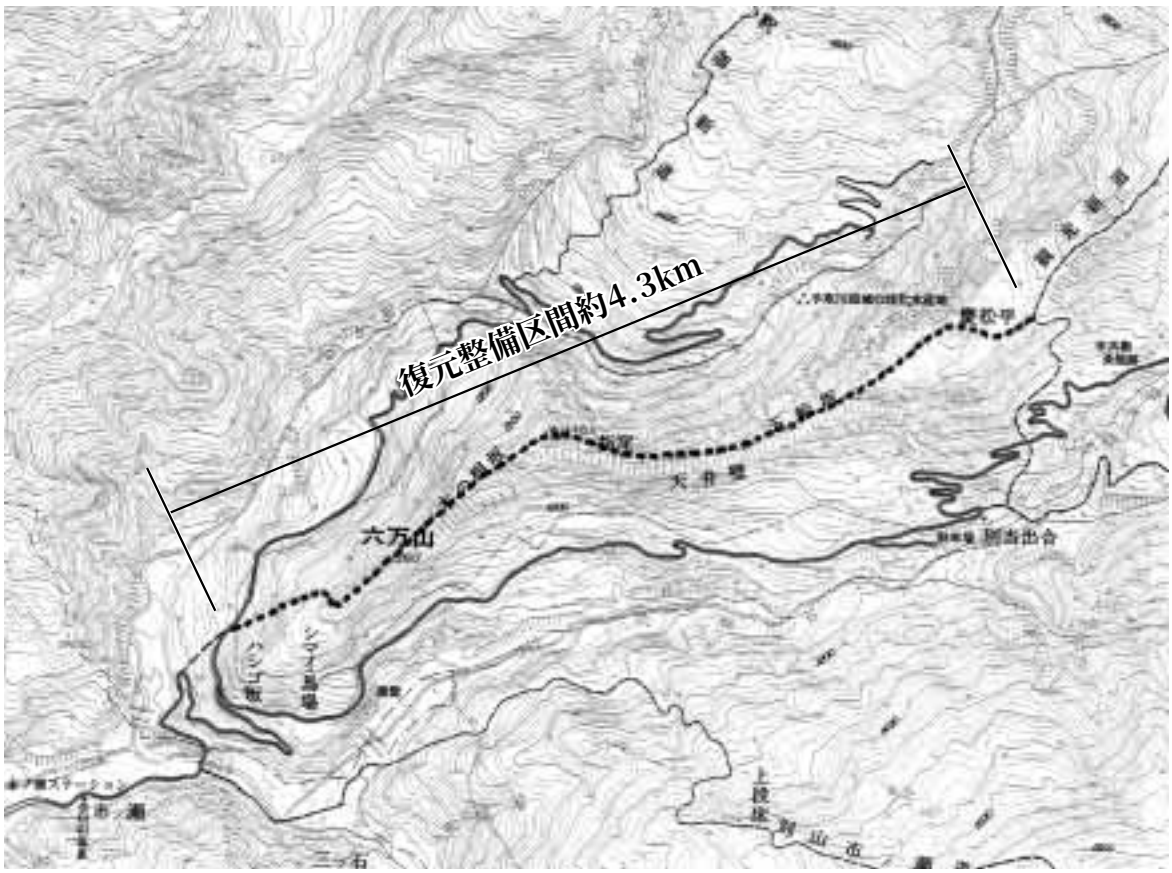
登山道ルートの選定

登山道は市ノ瀬から白山公園線（車道）、釈迦新道の一部を通り、林道のところで釈迦新道と別れ、六万山、指尾を経て慶松平で観光新道と結ばれます。今回の復元整備は釈迦新道との分岐点から観光新道までで、整備した距離は、当初計画では約 4.6 kmでしたが、途中何度かの現地踏査等によりコース変更を行ったため、最終的に約 4.3 kmになりました。六万山まではブナが主体の林で、六万山から天井壁までは、ヒノキの老木が点在し、途中にはシャクナゲが群生しています。天井壁から先、観光新道分岐までは笹藪が覆い茂っています。

登山道ルートの選定にあたっては、地元白峰村の人と関係行政機関職員に同行してもらい、実際に現地を歩いていただき、旧道のルートのポイントを一つずつ教えてもらいながら決定しました。途中、地元の一部の人は、少し前（昭和30年代）までは、慶松平まで竹細工用の竹、筍を取りに行っていたという話を聞きました。慶松平は標高が高いので、筍がとれる時期が遅くなるため、わざわざ遠くまでとりにきたのでしょう。また、このルート上には、途中に石仏が点在していたそうで

す。しかしそのうち何体かは、以前山から降ろしたとのことでした。事実、後でルートの確認をした時に、六万山より下で1954?年、紀元2600年などと読める文字が彫り込まれたブナの木があったり、指尾から天井壁の間には破損している石仏も見られ、かつて盛んにこの登山道が利用されてきたことがうかがえました。

現地踏査後、基本整備計画ルートを釈迦新道分岐から六万山までは、最後まで利用していた旧白山温泉からの道を再整備することとし、六万山から指尾までは、越前禅定道が非常に良好な状態で昔のままの形で残っているので、その道を復元整備することにしました。その先、指尾から五輪坂までは、やせ尾根で危険ではあるのですが、大きくルート変更できる場所もなく、止む負えずそのまま利用することとしました。慶松平から観光新道分岐までは、笹藪で旧道が分からなかったのですが、何回かの調査を実施した後、最終的には、地元の古老の話等から、昔、湯の谷川側に井戸の遺構があったと聞き、その付近をとおり観光新道と結ぶルートとしました。



今回整備した白山禅定道（越前禅定道）のコース

整備復元の方法

今回の整備復元計画にあっては、最低限登山道として機能出来ることを目標とし、再利用出来る区間は、草刈り程度でさわらず、ひどく荒れた利用困難箇所を重点的に整備する方針とし、後は、今後利用状況を見ながら、補修工事等により、順次改良していくことにしました。実際には、釈迦新道分岐より六万山、天井壁から五輪坂、慶松平から観光新道分岐までの三か所を重点整備区間とし、集中的に整備工事をすることにしました。

まず、釈迦新道分岐より六万山までは、岩が重なり、歩きづらいので、その岩を割り、石張りに転用しました。そこから先は、急勾配で高低差も激しく、登山道の十分な幅の確保も困難な所も何か所かあり、今までの他の登山道補修及び整備工事の事例等を参考にして、丸太積土留工を谷側へ

入れて登山道の幅を確保しました。高低差の激しい所は、丸太階段を用いました。ここでは、整備の上で支障になり、切り倒した樹木も階段の材料として利用しています。現地での打合わせの段階では、階段の間を広くとるようにと心がけたのですが、現実には階段の間が狭く、多少歩きづらくなってしまいました。

指尾では、湯の谷側は砂防工事指定地区と重なるため、反対側の柳谷川側を通っています。この箇所も岩が重なり合い、歩きづらいため、釈迦新道分岐からの登り口と同じく岩を割り、石張りとしました。

天井壁から五輪坂の間は、やせ尾根で起伏が激しく、岩ももろいため、ハシゴと木道橋を使用しました。当初は高低差がありハシゴを用いたところも、階段等で整備出来ないかと考えていたのですが、特に高低差が大きく、岩場で急なため、ハシゴを使用せざるをえなくなりました。角鋼管の上に板を当て、歩きやすくしたつもりでしたが、利用された登山者の声を聞くと、上りは良いが、

丸太積土止工

丸太階段

木道橋

石張り

ハシゴ階段

下りは重い荷物等を担いで降りるには、ハシゴが急すぎるのではないかという意見もありました。木道橋は、起伏が激しい区間に設置し、平らになっていて、歩きやすいはずです。ただ、この天井壁から五輪坂との間は、もう少しハシゴ、木道橋が必要な箇所です。次の補修、改修のときに整備する予定です。

そして、慶松平から観光新道分岐までの間は、湿地帯では木道橋を用い、分岐部には、旧観光新道の丸太階段が残っていたので、これを利用し、石張り階段とした後は、草刈りのみにとどめました。

今回の整備工事をふりかえって

今回の整備工事は、全体的には最低限の整備しか行えなかつたので、何かと問題点も多いかも知れませんが、何とか歩けるといったところまで整備できました。、まだまだ改修箇所があったり、道標の整備も遅れていますが、今後、順次改良、補修をすすめる予定です。その改良、補修には、最近整備した他県、県内の登山道の改良、補修例を参考に、採用できるものは、取り入れていきたいと考えています。

登山道整備には、標準的な方法も構造例もなく、参考となるものがあまりありません。また、ヘリコプターによる資材の空輸など、山麓の工事とは違った方法を用いることが多くあります。初心者から上級者まで登る白山に適した登山道にするにはどうしたらよいか、本当に手探りで整備をすすめてきました。諸先輩方や業者の方の経験談、また、関係機関、各種団体の方々の意見も取り入れました。そして、過去に整備した所を歩き、状況を見て回り、多少工夫し、生かせるものは生かしながら、整備の方法を検討しました。ある人から、「登山道を天気の良い日ばかりでなく、雨の日なども含め、何度も何度も歩いて初めて良いところ、悪いところが分かるはずだ」と言われた意味が整備して分かりはじめました。歩けば、歩くほど、整備したところ以外が、早く整備しろと言っているように感じます。

白山禅定道（旧越前禅定道）と岩屋俣谷の整備工事が完成すれば、今までは白山登山の為の通過点であった市ノ瀬集団施設地区に登山、キャンプ、周辺自然観察等に利用できるところが増え、今とは多少違った集団施設地区として生まれ変わることと期待しています。

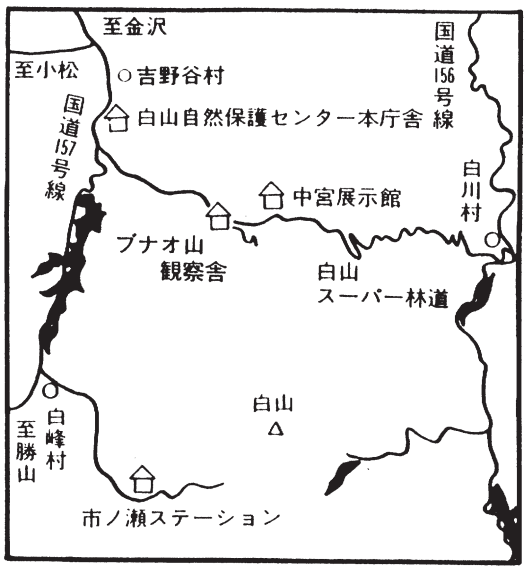
特殊な環境条件の現場で気象の急変、工事内容の変更も多くあり、工事も楽でなかったのですが、事故もなく無事工事が終わり、ほっとしているところです。白山禅定道整備にご協力していただいた、関係者のみなさまにお礼を申し上げます。

この登山道は、室堂より観光新道、白山禅定道を経由して市ノ瀬までの延長は約10kmで、コースも長く、高低差もあるので、初心者にはきつく、中級者以上の比較的に体力ある方の利用が望まれます。また、途中、水をとれる所もなく、市ノ瀬や室堂で水の確保を忘れないようにして下さい。

＜白山自然保護センター＞

施設だより　中宮展示館

田中　稔



4月24日

去年の11月末以来、通行止めになっていた白山スーパー林道のうち、中宮温泉までの無料区間が今日から開通する。ハイビジョン撮影のためカメラマンらに同行し、谷あいに残雪の残る展示館裏の自然観察路へ向かう。ニホンザルの群れ－カムリA群が雪どけを待ってましたとばかり、早春の若草の採食に懸命のところに出合う。観察路の上下をはさむように40頭以上を数えることができる。目的地のカタクリの群落はちょうど咲き、きれい。

春の一時、キクザキイチリンソウ、ワサビ、タチツボスミレ等が花の彩りを競い合っていた。残雪の下、枯枝や落葉をかき分けて何とか芽を出して花を咲かせる春の営みに元気づけられる。東荒谷や尾添の集落裏のブナ林は一足先に新緑の化粧を整え始めていたが、展示館前のブナは固く芽を閉ざしたままだ。

5月1日

今日、今年初めて中宮展示館へ出勤。ゴールデンウィークの駐車場は朝から車がいっぱい。イヌワシに挨拶しなくちゃと双眼鏡を持って前庭へ出る。猿ヶ浄土の稜線に焦点を合わせると、間もなく成鳥の番が舞う。おもわず、「元気か、ありがとう。」独り言を言ってしまった。ほっとする毎年の中宮展示館の初出勤である。

5月9日

蛇谷自然観察路沿い、観察路上側のブナ植林地では、カタクリの開花が終わるのを待ちかねていたのか、ニリンソウの白い花が絨毯をしいたように一面に咲きそろう。カナヘビがちょろちょろと動き、ウスバシロチョウがひらひらと飛ぶのが見られる。

6月9日

展示館近くでホトトギスの鳴き声に聞き耳をたてていると、アカショウビンが鳴く。6月4日に一里野でホテルのガラス窓に衝突した個体をひろい、今朝は吉野谷村の自宅でその澄んだ声に目を覚ましたのだからアカショウビンの白山麓への渡りは、案外多いのかもしれない。

平成8年2月の雪崩で半壊した展示館の改修工事が急ピッチで進む。朝から多くのダンプカーがせわしくやってきている。施設の全利用が待ち遠しい。

ウスバシロチョウ

市ノ瀬ステーション

加藤　友美

4月29日

市ノ瀬ステーションが開館する（前日に県道白山公園線が別当出合まで開通する）。ステーション周辺には雪はない。去年は残雪が大変少なかった白山だが、今年は平年並みとなり、室堂平で6mほどの積雪があるとのこと。

白山展望台へ行く途中に、小規模だがミズバショウの咲いているところがある。ちょうど見ごろで白い「仏炎ほう」がとても美しい。市ノ瀬園地にはマルバマンサクやエンレイソウが咲き、春の訪れを感じる。

5月8日

根倉谷園地で「花と春を楽しむ会・ミズバショウの招待状」という環境庁と共催の観察会を行った。ミズバショウは見ごろをすぎていたが、好天に恵まれ、別山の遠望・ホンシャクナゲなどを見ることができ、根倉谷の歴史の話も聞くことができた。参加者からは「いろいろな解説がありよかった」「土の中の虫を見て感動した」などの感想を聞くことができ、楽しい時間を共に過ごすことができた。

自然観察会「白山新緑のブナ林観察会」
目かくしをとると、目の前にカツラの大木がある

6月7日

とてもいい天気だ。チブリ尾根にて毎年恒例の春のブナ林観察会が行われる。ブナに触ったり、聴診器を当てて音を聞いたり、寝転がって見上げてみたりしてブナと親しみ、ブナ林の話を聞いた。モリアオガエルの卵塊やトチノキの花なども見ることができ、「大きなブナの木に感動した。気持ちよかった。勉強になった。」とみなさん、笑顔でステーションに帰ってきた。ブナの森とその観察会がいつまでもあるといいなと思う。

市ノ瀬ステーションの行事

〇ガイド・ウォーク

市ノ瀬周辺の自然を、一緒に散策して歩きましょう。

日　時：毎週土・日　10:00～約1時間／14:00～約1時間

参加費：無料

＊業務等の都合により中止の場合もあります。お問い合わせ・申し込みは市ノ瀬ステーション＜TEL:07619-8-2504＞まで。

センターの動き（3月27日～7月25日）

3.28　ブナオ山観察舎自然観察会
（ブナオ山観察舎周辺）
4.25　冬の動物や自然を写そう描こう
（ブナオ山観察舎周辺の写真・絵画展）
作品表彰式
（ブナオ山観察舎）
4.29　中宮展示館・市ノ瀬ステーション開館
5. 5　ブナオ山観察舎閉館
5. 8　自然観察会
「花と春を楽しむ会・ミズバショウの招待状」
（白峰村根倉谷）
5.19　石川県博物館協議会総会・奨励研究発表
（金沢）
5.30　吉野谷村グリーンデー（中宮展示館）
6. 6　自然観察会「白山新緑のブナ林観察会」
（白峰村チブリ尾根）
6.10　石川県白山自動車利用適正化連絡協議会
（白峰村役場）
6.19　白山夏山のつどい－白山の自然－
（野々市）
6.20　ブナ下草刈ボランティア（中宮展示館）
7.16～　ピーク時交通規制（市ノ瀬）
7.22～23　酸性雨情報交換会(山中･白山スーパー林道)

編集後記

ここ数年暖冬が続いていましたが、数年ぶりの積雪があるとの予報が出されていました。昭和38年、昭和56年と18年ごとに大雪があり、ちょうどその周期にもあっていたのです。しかし、実際には昨年のような少雪ではなかったのですが、特に多いというほどでもありませんでした。昨年は白山山頂部でも積雪量が少なかったため、雪どけも早くすすみ、クロユリやハクサンコザクラなど高山植物の開花も早まってしまい、登山者のピーク時には花を見ることができませんでした。今年度は例年どおり7月下旬頃から見頃になると思われます。

さて今年度、かつての登山道、禅定道のうちの一つ越前禅定道の一部が白山禅定道として復元され、登山道として利用できるようになりました。今号の「はくさん」では、白山禅定道（旧越前禅定道）を特集として記事を書いていただきました。かつて修行のために登山されていたことを振り返ってみるのはいかがでしょうか。

今年度から3年間の予定で白山室堂の改修工事がはじまるため、室堂での食事の供給ができませんし、周辺では登山道の迂回、立ち入りの制限などもありますのでご注意下さい。また、土砂崩れ復旧工事のため、岐阜県平瀬～大白川の間、白山一里野～新岩間温泉は全面通行止めです。登山者の歩行による通行もできません。ご注意下さい。

白山自然保護センターでは、白山の自然誌19「白山の蝶」を発刊しました。白山の高山帯やブナ林で見られる蝶について解説しています。中宮展示館等、白山自然保護センターの各施設で配布しているほか、送料として1部140円を負担していただければ、郵送いたしますので、ご希望の方は、当センターまでお申し込み下さい。

（野上）

目　次

表紙　蛇　塚 ……小川　弘司…1
旧越前禅定道をたどる ……栂　典雅…2
市ノ瀬の移り変り　―旧越前禅定道の中継地・湯治場 ……橘　礼吉…6
白山禅定道（旧越前禅定道）復元整備工事に携わって ……舘　清…10
施設だより（中宮展示館）……田中　稔…14
（市ノ瀬ステーション）……加藤　友美…15

はくさん　第27巻　第1号（通巻111号）

発 行 日　1999年7月25日（年4回発行）
編集発行　石川県白山自然保護センター
920-2326　石川県石川郡吉野谷村木滑ヌ4
TEL07619-5-5321　FAX07619-5-5323
印 刷 所　株式会社　橋本確文堂

（本誌は再生紙を使用しています）